

気候変動に振り回されながらも コーヒーを作り続ける東ティモールの人々

(文: NGOパルシック 東ティモール駐在 伊藤淳子)



赤く色づいたコーヒーの実

私たちはコーヒーの木の新生活動に特に意欲的な組合員3人を、この1年間ビデオカメラで追ってきました。コーヒー生産者が、彼らの言葉と実践でコーヒー畑改善の必要性を他の生産者に伝える、そういう動画をつくりたいと思っていました。選ばれた3人は最初こそ緊張していましたが、撮影を重ねるごとに饒舌になり、こちらの期待以上に役割を果たしてくれました。この動画を10月末に開催されたコーヒーフェスティバルの閉会式で公開したところ、参加者、特にコーヒー生産者たちが見入って、笑って、そして共感してくれているのが伝わってきました。「毎年コーヒーが俺たちを食わせてくれるのだから、今度は俺たちがコーヒーを食わせる番だ」と、施肥の大切さを表現する一言には、会場が大きな拍

しかしふと気づくと、コロナ禍だ、コーヒーが足りない、と狼狽えるのは私たちのほうで、東ティモールの人たちは慌てず騒がず、あるがままを受け入れながら、今日を生きるためになすべきことをしています。2019年に手入れを始めたコーヒーの木が、来年あたりからようやく実をつけ始めます。豊作を願って、また新たな二年を東ティモールの生産者たちと迎えたいと思います。



コーヒーの裏作の年にあたる2022年、マウベシコーヒー生産者協同組合（コカマウ）は前年の3分の1ほどの収量予測を立てました。この数年、天候不順で雨季から乾季への移り変わりが不安定でしたが、例年通り5月には雨季がきれいに開けたので、かつてのように6月には収穫が始められそうだと準備を進めていました。

そんな中、古くなったコーヒーの木の新生活動は順調に進んでいます。コカマウの237世帯の畑では、老朽化したコーヒーの木を地面から30センチの高さで切って新しく出て来る芽を育てています。また新しく育てた苗を古い木と植え替え、傾斜地にある畑にはテラスを作りました。そのためコーヒー畑の景色がだいぶ変わってきています。



コーヒーフェスティバルで壇上に上がり拍手で迎えらる3人の組合員